

萩市 第2分科会

パネルディスカッション

人口減少社会への挑戦 ～地域おこし協力隊の力を活かす～

歓迎挨拶

藤道 健二 (ふじみち けんじ)
萩市長

コーディネーター

田口 太郎 (たぐち たろう)
徳島大学大学院准教授

パネリスト

藤井 裕也 (ふじい ひろや)
山村エンタープライズ代表理事

吉田 知弘 (よしだ ともひろ)
萩市地域おこし協力隊

高橋 陽子 (たかはし ようこ)
萩市地域おこし協力隊

白神 敦司 (しらがみ あつし)
萩市地域政策部次長



パネルディスカッション

コーディネーター



田口 太郎氏
(たぐち たろう)

徳島大学大学院准教授

1976年神奈川県茅ヶ崎市出身。1999年早稲田大学建築学科、2001年同大学院修了。小田原市政策総合研究所特定研究員、早稲田大学建築学科助手、新潟工科大学建築学科准教授を経て、2011年より現職。専門は都市計画・まちづくり。特に市民による主体的地域づくり体制の構築プロセスを専門としている。2007年に発生した新潟県中越沖地震で被災した商店街の復興支援、2004年に発生した新潟県中越地震で被災した集落の復興を支援する地域復興支援員の研究や人材育成、現在は地域おこし協力隊の人材育成なども行っている。自身も徳島県佐那河内村の11世帯の集落で古民家を改修して暮らしている。

パネリスト



藤井 裕也氏
(ふじい ひろや)

山村エンタープライズ代表理事

1986年岡山県岡山市生まれ。岡山大学卒業。2011年より岡山県美作市地域おこし協力隊として上山地区での棚田再生

に携わる。2012年4月より岡山県の北端、人口700人の美作市梶並集落に移住し地域づくりに取り組む。地域おこし協力隊期間中、単身者向けのシェアハウス「山村シェアハウス」を開設し、移住促進に取り組む。その後、協力隊卒業生で地域人材の育成と還流を目指す組織、山村エンタープライズを設立。地域人材の育成プログラムの企画運営・農山村での不登校ひきこもり自立支援事業と移住促進を行う「人おこし事業」などを企画実施。総務省地域おこし協力隊のサポートデスクの専門相談員でもあり、岡山県の地域おこし協力隊卒業生の組織代表として、全国の外部人材及び、地域おこし協力隊が行う事業の専門的アドバイス及び、協力隊事業の企画運営を行う。



高橋 陽子氏
(たかはし ようこ)

萩市地域おこし協力隊

千葉県千葉市出身。大学卒業後、大手出版社で雑誌編集に携わる。その後、

藤田観光株式会社ホテル椿山荘東京に転職。営業企画課に所属し、主にホテル庭園の季節イベントを担当する。広大な庭園を駆け巡る日々の中、同ホテルのルーツである萩に出会う。その一方で、国づくり、まちづくりをしてきた父の他界をきっかけに地方創生へのチャレンジが芽生える。そして萩に移住し、萩市地域おこし協力隊として萩市商工振興課、萩市観光協会に務め、同隊員との結婚を機に本年4月、むつみ総合事務所(地域振興部門)へ着任。「農家の嫁」となった今、過疎の時代に向けての取り組みを始めている。



吉田 知弘氏
(よしだ ともひろ)

萩市地域おこし協力隊

大学卒業後、アパレル企業に就職。その後、山小屋や離島のホテルなどで働き、2017年12月協力隊に着任。夏みかん関

連や農泊関連、移住定住のイベント企画やマルシェの企画などに携わる。現在は、地域課題解決のための場づくりをするNPOの立ち上げを計画中。



白神 敦司氏
(しらがみ あつし)

萩市地域政策部次長

採用年月日 平成4年4月1日

勤続年数26年(平成30年4月1日現在)

平成4年4月1日 福栄村経済課林政係配属

平成30年4月1日 萩市地域政策部次長 兼 地域づくり推進課長

現地視察

- 萩・明倫学舎
- 道の駅萩しーまーと





歓迎挨拶

萩市長

藤道 健二氏 (ふじみち けんじ)

藤道／皆さん、おはようございます。ようこそ萩市へいらっしゃいました。昨日の全国過疎問題シンポジウム全体会と交流会に参加された方が多いと思いますが、お疲れ様でございました。今日は萩市の分科会でございます。これだけ多くの皆様にお集まりいただきまして、感謝申し上げます。

昨日は、「田園回帰の時代、人と仕事を取り戻す1%戦略」という基調講演を藤山浩先生からいただきました。そのあとは、私もパネリストとして参加しましたが、実際に地方に赴いて事業を行っている方にご参加いただきながら討論いたしました。市、地方の自治体の現状分析からやっていくほうが望ましいというお話があり、私自身もこの地域活性化のためには現状把握をしたうえで、それで一つひとつ手を打っていかねばいけないと感じているところです。それと、人を呼び込むためには受け入れ側も重要だということです。人との接し方、周辺の住民の方々のサポート、これが何より重要なのではないかと思います。さらには萩市の情報の発信のしかた、萩市の魅力を地元の方々に訴えるということもあわせてやらねばいけないということも学びました。

今日は、田口先生をコーディネーターとして、パネ

リストとして藤井裕也さん、あとは萩市地域おこし協力隊のメンバーふたりと行政からは萩市地域政策部の白神次長、この方々で討論会をしていただきます。地域おこし協力隊について、萩市では、このところ積極的に採用し、地域活性化のお手伝いをしていただくということでこれまでやってきております。これから先も同じように、地域おこし協力隊の方々に地域おこしに協力していただきたいと考えております。ただ、今の地域おこし協力隊の活動のフィールド、あるいは環境がこれでいいのか、何か課題はないのかどうか、この討論を通じて私自身も学ばせていただいて、そのうえで解決しなければいけないという課題がありましたら、それは積極的に対応していきたいと思っております。この討論を楽しみにしていますので、どうかパネリストの方々は今日は思いのたけをすべて語っていただきたいと思っております。

結びに、本日お越しになられた皆様方のご健勝とご多幸を祈念いたしますと同時に、全国各地から多くの方に来ていただいておりますので、それぞれの地域が元気になりますことを祈念いたしまして、私からの歓迎のご挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしく願いいたします。

パネルディスカッション

田口／はい、それでは、おはようございます。今日は各地から地域おこし協力隊に関心のある、おそらく行政の方もたくさんいらっしゃっていると思いますので、あまり、どこにでも書いてあるようなお

堅い話ではなくて、実質的な話を引き出せるように、僕自身頑張っていきたいと思っておりますので、皆さんも何かちょっと気になることがあったら、皆さんの発表が終わった後ちょっと時間をとって質問を

受けたいと思いますので、皆さんも気になることは引きずらずにその場で出していただくのがいいかなと思っております。

それでは、これからパネルディスカッションに入っていきたいと思いますが、まず、ご登壇いただいている4名の方に話題提供をいただいてからディスカッションに入っていきたいと思います。順番ですが、萩市役所の白神さんからご発表いただくのがいいかなと思います。簡単に自己紹介も含めてご発表いただくのがいいかなと思います。よろしく願いいたします。

白神／私は、この4月から地域おこし協力隊の担当をしておりますが、通算20数年、農林関係1本でやってきましたので、話がどうしても農業色を帯びてしまうかもしれませんがよろしく願いいたします。

さて、地域おこし協力隊につきまして、萩市では地域おこし協力隊を非常勤特別職員として委嘱しています。平成27年にこの事業に着手し、22名委嘱した実績があります。県内最多14名の隊員が今、地域づくり活動に従事しています。3年間で卒業するようになりますので、今年の夏くらいから、ぼちぼち卒業生が出ておりますが、やはり起業というのは非常に難しいと改めて感じているところです。採用につきまして、平成27年あたりは非常に応募多数でしたが、この4月からは、世間ではやはり売り手市場というような状況で、応募数は減少しています。ただ、見方を変えればそれは本当に地域で頑張ろうという方が来ていただいているという認識で、数ではなくて質だろうということで前向きに考えています。

採用にあたって気をつけていることは4点あり、まず、「地域の課題とニーズの仕分け」です。地域おこし協力隊も地域課題をすべて解決できるわけではないということで、相当以上のストレスをかけてはいけないという心得が必要です。2点目は、「受け入れ側の協力隊制度に対する理解と協力体制の構築」です。彼らも裸一貫で地域に入ってきますし、協力隊は何でも屋ではありません。まわりの

受け入れ、行政も含めて、人それぞれ、すべてを受け入れる人、閉じこもってしまう人もいるでしょう。それをうまくいかにバランスを取っていくことが行政、担当者である私の仕事だろうと思っています。市役所も合併をして大きな組織になりましたので、役所内でも共通認識、これがやはり重要なポイントだと思っています。3点目は「募集条件の明確化」です。身分も含め、どういうことを萩市は求めているのか。そういったことも募集の際には明確にPRしていかないと、なかなか理想の隊員は来ないだろうと思っています。4点目は、「ミッションの明確化」です。今までは地域で頑張りませんかといった地域型の募集をしていましたが、これからは具体的なミッションを示していかないと受ける側がイメージがわからないだろうと思っています。そして情報誌や市報などによる一方通行のPRは限界にきていると思います。これからはSNSなどによる情報発信も必要と感じています。

そして、協力隊の活動開始から定着に向け、現在、月に2回、協力隊員が集まって情報交流、自分の位置、立場がどうなっているかということも含めて情報交換の会をしています。研修会や交流会への参加ということで、これは社会の動きであるとか、外部的な自分の位置の確認などを行っています。それから、活動する地域で住民とのミスマッチが生じていないか、悩み等の把握ということで、もしもどうしてもあわないとか、目的が違っていたとかそういうことであれば、これはもう、市役所内で部署でそれぞれ配置をしていますので、職員のように



人事異動をもって配置換えをしたケースもあります。次に活動報告会の開催ということで、地域を含め相互理解です。協力隊員で若いのが来ているけど何をしているのかわからないということになってはいけないので報告会を定期的に行っています。そして任期終了後の支援、サポートということで、資格取得、起業支援、些少ではありますが卒業にあたっての支援も行っています。これが実際の活動報告の様子、地域の方の参加も求めて、彼らが何をしているのか見てもらおうということで開催した時の写真です。そして活動以外にも、地域のさまざまなイベントにも可能な限り参加してもらっています。神輿を担ぐもの、稲刈りをするものもいますし、いろいろな意味で、小さな一歩として彼らが歩み始めているところです。

田口／はい、ありがとうございました。それでは続いて吉田さん、よろしく願います。

吉田／こんにちは。萩市地域おこし協力隊の吉田と申します。よろしく願います。僕は岡山県倉敷市から、約2年前に萩市に移住してきました。もともとはサービス業、アパレルの関係で働いていました。地域イベントや音楽イベントを企画するのが好きで、学生のころからずっとやっていました。性格は好奇心旺盛、転校生とすぐ仲良くなる、最近考えていて思い出したのですが、いちばんに転校生に話しかけたいタイプでした。

協力隊になっていただいたミッションは、夏みかんの振興、農村宿泊体験の協議会のお手伝い、移住定住のイベントのお手伝いなどです。今日はそれ以外のイベント企画のを中心に話したいと思ってきました。

イベント企画ですが、夏みかんまつりというのが萩市で5月に開催されます。これは旧田中別邸、すごくいい建物で、ここの裏庭で毎年行っていて、たくさん人が来ます。このまつりで何かイベントをしたい、自分も出展したいと思って、もう少し夏みかんに寄せたイベントをしたいと思って、市役所の観光課に相談に行きました。すると、「中はもういっ

ぱいなんです」と言われました。それなら移住する前から僕が好きな景色が裏庭から外に出た河川敷にあって、ここで何かをやりたいとずっと思っていたので、「そこを使ってもいいですか」と聞いたら、観光課の方が快く「いいですよ」と言ってくださいました。それで、出店者を募ってここでマルシェを開催しました。他には、まちにパン屋さんがあるのですが、「その2階をリノベーションして交流スペースにしたい」とオーナーの方が言われまして、「ではみんなでリノベーションしよう」と、夏の暑い中、一生懸命やりました。それをリニューアルオープンする時にパーティーをしようということになって、僕が「ヨシダズナイト」という名前を付けてパーティーを企画しました。山口県内、いろいろな人に声をかけて、約70~80人くらい集まってくれました。

このようにいろいろやってみたのですが、協力隊着任当初に思ったよりも全然できていなくて、結構あせる時もあります。商品開発なども考えてセミナーなどもたくさん受けてやってきましたが、なかなか行動に移せませんでした。これはおそらく多くの協力隊が、そうだと思います。では、僕が今話した企画など、なぜできたのかと考えると、ゲストハウスrucoというのが萩市にありますが、ここの存在が大きかったのかなと思います。移住する前に、協力隊に興味を持っていろいろな土地を見て回りましたが、なかなかピンとくるどころ、自分の力を発揮できそうなところがないなと思いました。そんな時、萩市の募集を見て、萩市に行った人がみんないいと思うなと思って、行ってみようと思いました。そして、どこに泊まろうかと探した時に、このrucoが出てきました。で、泊まった時に、これは僕が泊まった時の写真ですが、いろいろな人が交流していて、こういう場所があったら移住してもなんとかなりそう、というか、こういうおもしろい人たちがいるのだったら、自分の力も発揮できるのかなと思って、移住を決めた場所です。

この場所は、自分にとって何なんだろうと考えた時に、自分にとってのサードプレイスだなと思いました。サードプレイスって、聞かれたことある方、い

らっしゃいますか？ サードプレイスって、最近ちょこちょこ出てくるワードで、第一の場所、自宅でも、第二の場所、学校や職場でもない、第三の場所という意味です。定義は、ちょっと漢字が多いですが、地域の中に溶け込んでいて、多種多様な人が気軽に利用できて、社会的地位を気にせずに交流できることで人間関係を構築できる場所と定義づけられます。ではサードプレイスはどのような効果があるのか、いろいろ調べてみました。すると、自分という存在をそこで再理解できて1歩を踏み出しやすくしてくれる場所ということがわかりました。そういう場所があったから、町の方々やある飲食店のオーナーと一緒に企画してくれたり、参加者が遠くから来てくれたり、ヨシダズナイトのような企画ができたのだと思います。サードプレイスには、社交的交流型と目的交流型とマイプレイス型という3つの型があるといわれています。いちばん下のマイプレイス型というのは要するにひとりになりたい人、今でいうスターバックスや皆さんの地元の図書館、インターネットの世界、家での自分の時間などです。ヨシダズナイトは社交的交流型ですが、開催した人からしたらいちばん上の目的交流型なのではないかと、また、手伝ってくれた人にとっても新しいことをやるという目的をもって交流した目的交流型なのではないかと思えます。

これは市役所のイベントです。萩・竹灯路物語という素敵なイベントでたくさんの人が来てくれますが、滞在時間が短いという課題がありまして、それでは飲食を絡めようということでバルイベントを企



画しました。ただやるだけではおもしろくないなと思ひまして、目的交流型というのをもう少し強くして、新しく、小さい挑戦をできる人を一緒に集めようと思いました。ちょっとわかりにくいですが、ピンク色のところは初めてイベントに出展する方々です。シェアキッチンやキッチンカーなどで、飲食店を開きたいとか、美容室を開きたいとか、これから小さく起業をしたい人に面貸しスペースで挑戦してもらおう場所にしました。こういう人たちにとって、イベント自体が今の仕事や家とは別のサードプレイスで、自分の居場所を確立することができる、そういう目的でやってきました。これからやりたいと思っているのは、このようにサードプレイスを週末起業家とか小商いをする人と関連づけて、萩市のおもしろい人たちが活動できる機会を増やしたいと思ひます。たとえば市民が民間企業で働きながら、休みの日だけイベント出店をしてとか、行政の方が週末にボランティアをするとか、NPOに入って一緒に仕事をするとか、そういう機会を生みだすようなまちづくり会社を作りたいと考えています。

また、旅行者にとっては、僕が萩市に移住を決めた理由のひとつである、rucoのようなサードプレイスがあることで、もう1回行きたい町になるのだと思ひます。皆さんもそうかもしれませんが、あの人に会いたいとか、あの店のあのおばちゃんと話したいとか、そういう場所がある、そういう人がいる町なのだと思います。そんな場所をたくさん作ってきたいです。そして、作っていく過程で、学生たちにも関わってもらって、いつか帰りたくなるような思い出を作っていきたいと思ひます。そういう活動が広がっていくと、発信も個々がしていき、それを見た外の人が「萩っておもしろいまちなんじゃないかな」となり、観光客や移住者が増えていくのではないかと思ひます。

この写真は、県外の方にはちょっとわからないかもしれませんが、松下村塾です。ここは吉田松陰先生やいろいろな人たちが交流して対話をして、結果的に明治維新が起きたという出発点です。ここは、当時彼らにとって、先ほど話した目的交流型のサードプレイスだったのではないかと考えました。

市役所の席の近くに歴史に詳しい職員の方がいて、いろいろな話を聞いています。その方の話しによると、高杉晋作は明倫館でいまひとつおもしろくない学校生活を送っていました。その時に久坂玄瑞に「おもしろいところがあるからいってみよう」と声をかけられ、松下村塾に行きました。そこで彼は自分の話を聞いてくれる人がいる、同じように話しあえる人がいると思い、自分の居場所を確立しました。そして、そこから日本を変えていったという人です。そんな彼にとっても、松下村塾は目的交流型のサードプレイスだったのだと思います。彼の言葉である「おもしろきこともなき世をおもしろく」これはもう自分でやっていくしかない、おもしろいことがないから自分たちで変えていこう、という意味です。こういう人たちが萩で増やしていきたいと思っています。萩っておもしろい、魅力的な人たちがたくさんいるので、彼らをつなげていくことで自分の力、自分の考え方でこのまちをよりよいものにしていく人たちの増やしていきたいと思っています。

田口／ありがとうございます。けっこう、町中で再生というか、新しい動きを作り出している、そういうことだと思います。続いて、高橋さん、よろしくをお願いします。

高橋／おはようございます。平成28年度採用の高橋陽子と申します。私は京葉工業地帯が広がる、非常にスモーキーな東京湾を見て育ち、暮らしてきました。大学進学と勤務先は東京都内で、最初に勤めたのはリクルートで11年ほどになります。広告媒体をリリースすることで有名なリクルートですが、その中でも珍しい雑誌の編集を主に担当してきました。一見華やかな雑誌編集ですが、実は非常に地味でアナログな工程が多い仕事です。そんな中でたとえ単純作業であっても仕事は自分で作っていくもの、メイクジョブしていくことを11年のあいだに学んできました。それから紆余曲折ありまして、萩がルーツである藤田観光株式会社のホテル椿山荘に転職しました。萩へは出張をきっかけに頻繁に来るようになりました。ちょうど3年ほど

前になりますが、藤田観光OBの先輩と一緒に、萩の港町で浜崎というところの地域活性化をその先輩と企画しました。観光地で有名な萩ですが、観光ということではなく、空き家の活用を軸にして住む人、働く人、楽しむ人を増やすことで、全国的な問題でもある地方における人口や仕事の減少といった課題解決の糸口になればという思いがありました。しかし、東京の人間がああしよう、こうしようといったところでこういったプロジェクトは進みません。デリケートな空き家問題に関しましては、10年くらいかかる覚悟でいかないといけないねということで、まずは私が浜崎に移り住まないことは進まないのではないかとということで、ちょうどその時に萩市地域おこし協力隊の募集があり、応募する流れになりました。

私は一昨年の夏に、協力隊員として萩に移住してまいりました。1年目は商工振興課で、萩の事業者と就職希望者をマッチングするシステム「萩暮らしnet」というウェブサイトを作成しました。自分のこれまでのキャリアをこの事業に役立てるだろうということと、今後、自分が萩の浜崎で事業を興していくには市内の産業構造や産業の事情を早く知りたかったため商工振興課のこのプロジェクトを希望しました。

そして2年目は20年ほど東京でマーケティングの世界にどっぷり浸かって来たことがおそらく買われたのだと思いますが、萩版DMOのマーケティング責任者のオファーがありまして、それを受ける形で、昨年度は1年間萩市観光協会にいました。

そして今年の2月に、同じく協力隊員との結婚を機に、今年度は3年目の最後の年になりますが、のどかな田園風景が広がる市内のむつみ地域へ異動となりました。むつみでのミッションはこちらの3つになります。いちばん上の「農家の嫁」という研修生とはどういうことかと言いますと、夫がトマト農家の1年生でして、家業のトマト栽培と一緒にやっっていこうということです。いちばん下のむつみ地域の観光振興ですが、このむつみ地域では、夏の風物詩となったひまわりロードというのがありまして、そちらの継続を見直すことをこの夏にしまし

た。実はこのイベントですが、30年近くたっているイベントなのですが、ずっと資金と人手不足に悩まされていたそうです。これを継続させるにはどうしたらいいか考えたのですが、ひまわりの栽培、ひまわりの花の観賞、ひまわりの種の収穫、そしてその種を搾油する、そしてその油を販売する、そしてまた次の年に栽培する。こんな経済のサイクルをこのお花畑の上でできないか、そんなことを数年のうちに実現できる運びでちょっとやってみたいなということを考えて、夫の畑の一部を借りてひまわり栽培を始めたところで、今、種の収穫時期に入っております。このあと搾油の実験に入ろうと思っています。数年はかかると思っていますので、そのあいだ、ひまわりロードを維持するために、左の写真がありますが、ひまわりロードの募金箱を作りまして、観賞した方に「花を咲かせるために募金をお願いします」ということで、今年は32,000円ほど募金が集まりまして、それが予算の助けになればということで、5年くらい続けていこうと思っています。

私が暮らすむつみ地域は、高齢化率が市内でいちばん高い地域です。そんな地域で活動するようになって、いろいろ考えるようになったのですが、これまでの活動を振り返ってみますと、私が商工振興課や萩市観光協会で携わったプロジェクトのように、ジオパーク推進課や萩・明倫学舎といった市内でも注目度の高い部署のプロジェクトに配属になった隊員がほかにもいます。それぞれ期待を受けてやりがいを感じていたと思います。

しかし、これまでの経験やスキルを活かして仕事をしようとするのですが、民間と行政の組織の違いなのか、うまく立ち回ることができないことがあると感じました。仲間からも同じような悩みを聞きました。私の場合、萩市観光協会への派遣の際に、状況が変わって活動が難しくなってしまったこともありました。移住者ということで、まだまだ知り合いも少ない中で、マイノリティの私はまわりに味方がいないとか、自分自身も権限と責任がないといった存在に陥りまして、もどかしい毎日で、不完全燃焼で終わってしまったと思っています。

プロジェクトを遂行していくには仲間が必要で

す。私も東京時代、たくさんのプロジェクトを運営してきましたので、社内営業は本当に必須のことです。そのあたりは、自分で言うのも何なのですが、得意なほうでして、プロジェクトを担当する時もやってきたつもりですが、ちょっとなかなか限界を感じていますが、せめて、私レベルでいいからもうひとりほしいと、悶々とする日々が続きました。

そして次に、まだ半年ですが、結婚しまして、む



つみ村総合事務所に着任して感じていることは、まずは感謝のひとつことです。夫のトマト栽培の手伝いをミッションにしてもらえたということは都会のサラリーマン家庭で育った移住者の私たち夫婦にはとてもありがたいことでした。農業のスキルだけではなく、そのあいまの家事やイベント参加や会合、とにかく農家のお嫁さんってやるのが本当に多いのです。そういった生活全般をバックアップしてもらっているように思っています。それは地域おこし協力隊という制度だからこそ、そういった環境を提供いただいているのではないかと感じています。本当に、親も近くにいなくて、愚痴る人も相談できる人もいないのですが、私が会ったこともないようなトマト農家のおばあちゃんが、私は地域活動をたくさんやっていますが、例えば神楽の練習に夢中になっていると「まだトマトを始めたばかりなのに神楽なんかやってる場合じゃないだろう」と叱ってくださったりとか、お母さんの役割をしてくださったりとか、それも総合事務所に所属しているからこそ、協力隊であるからこそ、そういった村を上げて私たちを応援してくれているという環境で、本

当に、ふたりで「これからもやっていけそうだね」とよく話している昨今です。

ただ、農家の嫁として感じることもあります。私が東京でガツガツと、男性も女性もない中でやってきた人間なので余計感じてしまうのですが、地方や農村漁村ではまだ男性社会が色濃く残っているといます。人口がこれからどんどん減っていく中で、農家の嫁さんは、だんなさんありきでの日々のことだと思うのですが、農家のお嫁さんも経営感覚や意識を持って家業の農業などをやっていたかなければならない、そんな時代だと思っています。婦人会や青年会などいろいろ携わるようにして会合も出るのですが、そういった枠もなく、今後はひとつになってやっていくようになるだろうと感じています。

そして、むつみの観光振興に取り組もうと、友だちとチャレンジもしたのですが、むつみひまわりロードの未来も考えるようになりまして、昨年も観光協会でやりながら思っていたことですが、やはりその土地の産業はその産業ということかなと思っています。そこには積み上げてきたものと資源があったり、得意なことや強みであると思います。そしてつい先ほどまで現役だった農機具や施設がごろごろあって、1からインフラを興さなくてもローコストで今からやれるビジネスチャンスがそういった過疎の里山にも、まだまだチャンスは眠っているはずだと感じています。

私のことでいえば、ひまわりロードでメイクジョブをして、ひまわり油を産業化することができるかもしれません。そしてその産業化、もしくは過程でも地域に起きている課題の解決の糸口が見えてきたり、観光という大きなおまけがついてきたり、場づくりや仲間づくり、そういったものもいろいろついてくるのではないかと考えています。ですので、過疎地で生きていく私は一事業者としてこの地域で「産業」をしていきたい、そう思っている今日このごろです。以上です。ありがとうございました。

田口／ありがとうございました。田舎でも産業を作っていかなないとなかなか持続性を確保していく

のは難しいという意味で、そういったチャレンジをされているということかと思います。それでは最後に、岡山からお越しいただいている藤井さん、よろしく願いいたします。

藤井／皆さん、こんにちは。藤井です。よろしくお願いします。私は立場としては、今日はOBという立場でお話させていただければと思います。私は今日、岡山から来ましたが、2011年の地域おこし協力隊でした。最初に、岡山県では災害がありまして、隊員も被災して、岡山県は災害がない県といわれて移住者をすごく入れてきました。全国有数の移住者を受け入れた県なのですが、それが災害を受けたということがありました。その中で協力隊はかなり力を発揮したと思っています。水が引いた3日後にすぐ住民の方々のところにいて、ニーズの聞き取りとかおにぎりを配ったり、避難所の支援とかすごく力を発揮した、これは日ごろから行政マンや地域とかなり関係性がよかったことでかなり動いていたと思います。全国からもいろいろな隊員が来てくれました。大分県日田市、7年間で3回被災したところがあるんですが、その協力隊が来てくれて応援してくれた、こんなことを最初に紹介しておきたいと思っています。

私は協力隊の1年目は草刈りをしていました。市長から「草刈りでもやらせておけ」と言われ、地元の方にもちゃんと草を刈れと怒られながら、1年間修業のような。でもいちばん楽しかった気がします。受け入れについてですが、岡山県の梶並地区というところで、ここはもう走馬灯のようによみがえってきます。2011年ですから全国で隊員は200人くらいという時代です。今は5,000人くらいに増えました。この200人の時代にしっかり受け入れてくれた地域はあまりなかったと思いますが、行政マンも含めてがっしり受け止めてくれました。僕が入ってから、後輩が4期いますが、だんだん地域も協力隊のことをわかってきて、こういうふうに接すればいいということを知ってくれて、地域の考え方や経験値も増えていくことがわかりました。

ひとつ事例を紹介します。僕はけっこういっぱい

失敗をしまして、交流会の失敗を紹介します。着任してすぐに、顔を知ってもらおうと思って交流会を開きました。もうひとりの隊員と料理を作って、チラシを配ってやったんですが、700人くらいいる地域なのですが、来たのは3人。1週間後に集落の人たちが発案してやったら、これは80人くらい集まった。これは歴然としているなど。協力隊としての地位、役割。やっぱり外の人ですから、中の人を集めるのは地域の人にやってもらったほうがよかったなど。役割が大事だなと思いました。

いろいろなことをしてきました。シェアハウスを開いて若い人を呼び込んだりしました。いろいろなこ



とがありました。任期が終わってからいろいろなところに引き継ぎました。シェアハウス、こんにやくを作ったり、空き家の管理サービスをやったり、お茶屋さんを開いたり、いろいろな取組をしましたが、全部は引き継げないのです、協力隊は。梶並集落は空き家の管理サービスをしたことがひとつの強化点だったわけですが、空き家の管理サービスは僕たちだけではできないのです、住民主体でやっているのです。僕の後輩の後輩くらいでかたちになったくらいで、なかなか3年ではできないですね。こんにやく作りは地域で作っているのです、僕たちではできないので住民に引き継ぎました。お茶屋さんは今でもやっています。シェアハウスは事業化して起業しましたのでそれで引き継いだ。要は任期中からいろいろな仕事をやっていましたが、いろいろな人とあっていないと難しいですので、環境を整備することが大事かなと思っています。シェアハウスについては不登校支援事業になっていまして、

地元の若者や夏とか来る若者を元気にするプロジェクトをやっています。

地域の中で、地元の高校で週1回、地域学の授業をしています。それから岡山県内の協力隊卒業生が100人くらいいて、そのネットワークを組織しようと思っています。それから国の協力隊サポートデスク、相談役もしています。

失敗事例を紹介しようと思いますが、Oさん、活動3年目、1年目は役場で移住定住をやりました。この人は大阪から移住したのですが、町に移住したいと、好きなので情報収集しようと思って、協議会で移住定住を仕事にしました。2年間は役場にはりついて移住の仕事に専念したんですよ。3年目に地域にいい空き家を見つけました。ここでゲストハウスをしようと思開業する。ここが問題で、いきなり地域にポンと入るわけで、地域と溝があった。外から来ていきなりゲストハウスを開いた。ゲストハウスはかなり人が来て売り上げは上がったけど、やれない。僕も行って感じましたが、住民からの視線を感じるというか、かなりつらい思いをして、開業したけど地域に残る気がしないということになっているという事例もあります。

協力隊は卒業生が多い、今年10年目ということで、縦の関係、隊員がいて卒業生がいてその卒業生が散っているわけですが、これが初期のころはネットワークがなくて、これを地域内につなげることが大事だということで、縦の関係もしくは斜めの関係をしっかり作っていこうと思っています。任期が終わったあともいろいろあります。起業したり就業したり、継いだり、中間支援、行政に入られる方もいます。いろいろありますが、横のつながり、仲間づくり、サードプレイスの話もありましたが、そういう場所や仲間がある意味大事になるかなと思っています。

田口／これから12時前くらいまでディスカッションしたいと思いますが、その前に会場の皆さんでちょっと詳しく聞きたいとか、このあたりよくわからなかったので質問で捕捉したいという方がいらっしやったら挙手いただければと思いますが、いか